野　草　観　察

仲間の花 勢揃い―13

前回に続いてキク科の花 16 種（№197～212）を紹介します。キク科 60 種の紹介は今回で終了です。

ヨ モ ギ

イワヨモギ

ヨモギは、春の若葉がヨモギ餅に使われることでお馴染みです。名前の由来は、よく繁殖し四方に広がることから「四方草」、春によく萌える草から「善萌草」、よく燃えるので「善燃草」、と書いてヨモギと読ませるなどの諸説があります。

イワヨモギは帰化植物です。北海道が主な生育地ですが、近年では法面緑化に利用され全国に広まっているようです。

オオジシバリ

ジシバリ（イワニガナ）

双方よく似ていますが、葉の形で見分けることが出来ます。オオジシバリの葉は、へら状の楕円形で、下部が羽状に切れ込むことがあります。ジシバリの葉は、円形～広い楕円形で長い柄があり、葉の縁にギザギザはありません。

オニタビラコ

ヤブタビラコ

オニタビラコは、道端や公園、庭のすみなどによく生えていて、高さは 20 ㎝～1m と幅があります。群生している姿にも出会いますが、単独で生えている方が多いです。
ヤブタビラコは、人家近くの林のふちや田の畔などやや湿潤な場所に生えていて、高さ 20～40cm ほどです。

ワタゲツルハナグルマ

コウリンタンポポ

いずれも帰化植物です。ワタゲツルハナグルマは、全体に毛が多く、茎は匍匐しながら節から根を出して地表に広がります。花は直径約 4 ㎝です、
コウリンタンポポの花は、直径 1.5～2 ㎝、鮮やかなオレンジ色が人目を引きます。

フ　キ

フキタンポポ

フキは山野に生え、また古くから食用のために栽培されています。若い花茎がフキノトウです。名前の由来は、冬に黄色い花が咲くことから「冬黄」、大きな葉がトイレットペーパー代わり使われたので「拭き」などの諸説があります。
フキタンポポは帰化植物で、原産地は中国～ヨーロッパ、日本へは明治時代に渡来しました。葉がフキに似ていて、タンポポに似た花を咲かせることから、この名前がついたと言われています。

ヌマツルギク

マメカミツレ

いずれも帰化植物です。ヌマツルギクの原産地は北アメリカ、昭和 50 年(1975 年)に福岡市で見つかり、今では関東地方以西に広がっています。
マメカミツレの原産地はオーストラリア、昭和 15 年(1940 年)頃に帰化が確認されました。草丈 5～20 ㎝、道端や空き地などで日向・日陰を問わず生えています。

セイヨウノコギリソウ

コメナモミ

セイヨウノコギリソウは帰化植物です。原産地はヨーロッパ、明治 33 年(1900 年)頃に観賞用として導入され、草地や芝生、道端などに生えていますが、最近ではドライブウエーに沿って山岳地帯にまで広がっています。花は白色～紅色まであります。
コメナモミは古い時代に中国から渡来し、現在では北海道から沖縄まで全国各地の荒れ地や道端のあちこちに生えています。

ツワブキ

ミズヒマワリ

ツワブキの名前の由来は、「艶葉蕗(ツヤハブキ)」や「厚葉蕗(アツハブキ)」などの諸説があります。花は直径約 3 ㎝です。
ミズヒマワリは中央アメリカ～南アメリカ原産の帰化植物です。第二次大戦後に観賞用として導入され、平成 8 年(1996 年)に愛知県豊橋市の梅田川で初確認されました。茎の切れ端などからも再生し、現在では関東地方・東海地方・近畿地方にまで分布が拡大しています。在来植物の生育を阻害するため、外来生物法においては特に警戒を要する外来種として“ 特定外来生物 ”に指定され、駆除等の必要性が喚起されています。